



孫たちが柩に花を添える



旅立ちの花の船のような

浜松の山里の静かな葬儀ということで一つのありようをしめす。ひとつの静寂な送りの事例。世の中の慣習とか権威とかしきたりとか、こだわらず。自分らしく、なによりも故人のよろこぶように、と。

家族が集う中、令和元年9月24日 田中康彦さん(76歳 天竜区両島在住)の奥様は静かに息を引きとられた。延命治療などしなかった。栄養補給の点滴も水も絶った。そして、10日目だった。「いよいよ旅立ちになりそう」ということで、北海道に暮らす娘さん五人家族が呼ばれた。そうして家族が和やかに、ともに過ごしている中、あれ？もう息をしていない。いつの間に……。そんなに穏やかな往生であったという。「自然に死ぬとは、どういうものか」。そのことを示された感じ。

この日のために、田中さんは柩(ひつぎ)を手づくりしてきた。あの世に旅立つ船のイメージで美しい流線形。友人の山口さん、鶴田さんが和紙でお経を貼り、杉のかんなくずで布団をしつらえた。

令和元年9月25日、茶毘に付された。その日の朝、手づくりの柩に遺体を移し、田中さんの孫たちが遺体に花を添える。ぼくも道端に生えていたオレンジ色のコスモス、曼珠沙華を摘んでいった。花に囲まれた遺体は、ジョン・エヴァレット・ミレーの絵画「オフィーリア」のような。田中さんは、軽の箱バンで斎場に運ぶ。ぼくと娘さん家族が棺を運ぶ。お坊さんもよばない。お経もない。遺骨をひろうとき、「ま、舍利礼文(しゃりらいもん)でもとなえましょうか」と私がよんだ。あとは静かに合掌しておくた。遺体が焼き終わると、杉をくり抜いて作った骨壺に入れる。ちょうど遺骨の収まるサイズでピッタリ。遺灰の一部は、田中さんの手元供養塔に、奥様の兄弟のおられる鹿児島、そして海洋に。

世の葬儀は、型にはまってぎょうぎょうしい。多くは義理の参列者たち。すべての進行は葬儀社が仕切る。こういふときだけ仏教の出番。聞いても意味もわからぬお経、さらには死後の戒名。

そして、香典だ、香典返しだ、精進揚げだ。いろいろと遺族は忙しい。そうしたことに何十万円、何百万円もお金をかける日本の葬送のありよう。肝心の遺族の心が、亡き人に向かう余裕がない。

だが、こうした手づくりで家族だけのおくりには、余計な気苦労なし。まことにシンプル。無駄を削ぎ落とし、心を込めるのみ。すると遺族の心が充満する。なにが大切かという、「おくる人の心」なんだから。おわたあと、近くの木質系の落ち着いた喫茶店で田中さんとお茶。もとは、プロテスタント教会。スウェーデン人の女性宣教師がつくた。娘さんたち家族は、フェリーでまた北海道に帰る。絶妙なタイミングであった。

「一日たっても、家の中に気が満ちている」と田中さんは言う。「奥様が臨在しているのかも。煩わしくて制限の多い肉体を離れ、思いのあるところに時空を超えて移動される。楽になって、ゆうゆうと楽しんでおられる。」。そんな話をしたのだった。

問い合わせ: 池谷080-5412-6370  
浜松市北部生きがい特派員 池谷 啓



[最後のお別れ](#)



[杉をくり抜いた骨壺](#)